永戸祐三さんを偲ぶ（続報）

協同労働推進、熱い思い引き継いで

昨年7月16日に77歳で亡くなった日本労働者協同組合連合会元理事長、永戸祐三さんを偲ぶ会が、12月13日、東京・都市センターホテルで開かれ、各界の方々から追悼の言葉が寄せられました。（前号の続報）

労協法成立、嬉しそうな顔今も

協同労働推進議員連盟共同代表・衆議院議員　田村憲久さん

突然の訃報に驚きました。

私は、労働者協同組合の法案づくりを、坂口力先生から引き継ぎ、桝屋敬悟先生とともに、お付き合いをさせていただきました。

法律をつくるには難しい課題がいっぱいあり、そのたびに議論し、一つひとつクリアしてまいりました。小さい労協は監事を置くのも大変だということで、私がふと思いついた、「全員でやればいいのでは」という発想を調べていただき、「組合員監査会」という、他にはない仕組みも取り入れていただきました。

法が成立した時の永戸さんの嬉しそうな顔、今も覚えております。

極めて大事な人と人の融合図る

元衆議院議員　太田昭宏さん

永戸さんが亡くなられたと聞いて愕然といたしました。

私は今年80歳で永戸さんは2つ下。反戦、反権力、大衆とともにという同じような空気を吸いながら、一杯飲もうという感じでお付き合いさせていただきました。20年以上前のことです。

私はいろんな法律づくりに関わってきましたけれども、協同労働を各地で具体的に前進させる法は非常に難しかった。難しい仕事をするには、ものの考え方、骨格がしっかりしていると同時に、いろんな形で人と人の結合、融合を図ることが極めて大事。それをやっていただいたのが永戸さんです。

まちおこし、地域おこしに貢献

宮城県大崎市長　伊藤康志さん

永戸さんは「武闘派」の一面と同時に、まちおこし、地域おこしにも大変貢献され、大崎市では、東日本大震災からの復興、子どもたちの居場所、若者の労働・雇用、高齢者の介護、バイオ燃料、環境保全型農業などの実践を9カ所で展開していただいております。

夜の席でも、美味しい地酒を飲み交わしながら、政治や社会、これからの地域づくりなど、いつも熱く語っておられました。

その志、理念をこれからのまちづくりで引き継いで実践して参ることをお誓いします。

前夜、何かを必死に伝えようと…

弁護士　岡田尚（ひさし）さん

永戸さんに会ったのは30年前、横浜法律事務所に在籍していた時だ。オウム真理教に殺された坂本堤弁護士は私の隣の席。永戸さんはいろんな会合に僕を呼び、話させてくれた。

95年に阪神淡路大地震、オウムによる地下鉄サリン、沖縄での米兵による少女暴行事件が起きた。永戸さんがコーディネートし、このテーマで闘ってきた3人の座談会も。今も問われる、次の時代を見据えた企画だった。

間に合った永戸本、広めたい

株式会社旬報社代表取締役社長木内洋育（ひろやす）さん

編集者になって45年。その間、数百人の著者とお付き合いをさせていただきました。

『協同労働がつくる新しい社会』という永戸さんの本をつくるに当たっては、何度となくお話をお伺いする機会がありましたが、永戸さんのように魅了される方はなかなかいません。話される中身も経験されたことも深い。面白くて引き込まれました。

亡くなる前に本ができ、間に合ってよかったという思いもありますが、この本を広めていくことを考えると、本当に残念。皆様にもご尽力いただければありがたいと思います。

韓国でも新しいスタート決意

韓国地域自活センター協会前会長　李炳学（イ・ビョンハク）さん

05年、京畿道地域自活センターの会長として日本を訪ねた時、永戸さんは盛大な晩餐会を開いて、私たちを尊重し、温かく包み込み、協同組合運動という大海に導いてくださった。自活運動も日本の労協運動を生きる教科書としてきました。

韓国社会的企業振興院の徐鐘植（ソ・ジョンシク）さん

永戸さんがいなくなり一つの終わりだが、新しいスタートのときでもあると思っている。

「私は非正規労働の問題を解決するための労働運動を続けていましたが、よい社会になるためには、よい仕事が必要である、それは協同労働、社会連帯活動だと学びました。永戸さんが切り拓いてくださった道を、新しく切り拓いていきたい。

労協と大企業、連携の必要感じ

日本フロンティア・ネットワーク、千葉商科大学　吉竹弘行さん

鹿島建設に勤めていた時、労働者協同組合という新しい働き方の方々と大企業の連携が必要になる時代が必ず来ると感じ、フロンティアネットワークの前身、労協クラブに入り、東京商工会議所の川村耕太郎常務理事を紹介させていただいた。都営住宅の跡地利用で一緒に企画提案したこともあった。

（献杯のあいさつ）

遺影に向かい、「ええか、飲めっ！」

古谷直道労協連元理事長（右）は「50歳を過ぎ、飲み会に1年間出て労協に」、田村守保元副理事長は遺影に向かい、「ええか、もう1杯、2杯、3杯、4杯、飲めっ！」

「働く人間が主人公に、そのためにどういう組織をつくるか、活動するか」。ほんとにいろんな議論をした。

意見が対立（労働者協同組合法の中に労働者保護法理を明確に規定することが不可欠と私は主張）することもあったが、どうしても事業優先になりがちになることは避けられないと、社会連帯の観点を別枠で入れるなど、彼の具体的・現実的な発想には舌を巻いた。

死の前夜、彼に逢えた。何かを必死に伝えようとしていた彼の想いを、私も引き継ぐ…。

人の世の幸せに尽くす労協発展へ

城南信用金庫元理事長、一般社団法人しんきん成年後見サポート理事長　吉原毅さん

私が城南信用金庫の理事長だった時に、福島の原発が爆発しました。「原発は反対だ」と宣言したら誰もフォローしてくれない。そんな時、永戸さんが来て、「金融機関のトップが原発反対か」と聞くので、私は「信用金庫は銀行と違う。社会のために役に立つ協同組織の金融機関です」と言った。そんなことからのお付き合いです。

12年、東京ドームを借り切って、全国の信用金庫に呼びかけ、東日本復興のための「〝よい仕事おこし〟フェア」を開いたのですが、この名前は永戸さんの許可を得ていただいたものの。このフェアは毎年、活況を呈しています。

城南信用金庫の評議員も務めていただき、全支店長の前でのご講演も。

これからも、永戸さんの教えを胸に、人の世の幸せに尽くす労協の発展のために全力を尽くします。

共感の輪どれだけ広げられるか

協同総合研究所理事長　大高研道さん

労協連の原則検討委員会に呼ばれた時のこと。何回か開催された後に、「自分たちの思いを明確に伝える一文が必要」と永戸さんが言い出し、労協の性質を見事に描いた「宣言」文ができあがりました。思いつきのような発言が人の心を動かす。研究室の中では得られない経験でした。

22年、永戸さんと対談した際、私が書いた「協同の発見」誌の巻頭言を「読んだよ」と言われ、「本当に読んでくれてるんですか」と軽口を叩いたら、にやっと笑って、鶴岡市出身の土井大介のその詩をそらんじ始めました。

吹き荒れの　ふるさとの
冬景色ほど　おれの心を
ふかぶかと　奮いたたす
ものはない

雪国で生まれ育った私の原風景ですが、同じく日本海沿岸で生まれ育った永戸さんにも響くものがあったのかもしれません。

永戸さんが多くの人々と共に歩んだ協同の蓄積は、協同労働のひとつの原風景、共感を伴う協同の原風景になっているように思います。その共感の輪をどれだけ広げることができるか。それを残された私たちの使命に据え、これからも歩み続けることを誓いたい。

偲ぶ会には283人が参加。黙祷を捧げ、発起人の日本労働者協同組合連合会古村伸宏理事長と労協ワーカーズコープ・センター事業団藤田徹理事長があいさつ。故人の学生運動時代からの映像が流され、献杯、追悼の言葉。妻・永戸百代さんが謝辞を述べ、発起人の日本社会連帯機構山本幸司代表が閉会の辞を述べました。